

日本台湾学会第13回学術大会記念講演
「ベネディクト・アンダーソンとの対話」

2011年5月28日
於 早稲田大学27号館小野記念講堂

比較史、地政学、そして日本において台湾を研究するという寂しい営み
—ベネディクト・アンダーソンへの応答—

呉 叡人
(中央研究院台湾史研究所)

序にかえて

ある意味において、今日のアンダーソン教授のスピーチは、2003年に始まった、教授とわたしとのソクラテス的対話の続きであるといえます。それは、教授が、わたしがシカゴ大学へ提出した博士論文—それは教授の現代の古典『想像の共同体』に触発され、またそれへの批判をめざしたものでしたが—を読んでくれたときから開始されたものでした。わたしの師とわたしのあいだには、二つの大きな違いがあります。その第一は、大日本帝国の性質をめぐる純粋に学問的な問題です。わたしは、日本帝国が、ヨーロッパの諸帝国とは異なるものだと考えています。アンダーソン教授は、その間に、さほどの違いはないと考えておられます。第二点目は、より政治的な問題です。いや、個人的といった方がよいでしょうか。すなわち、台頭する中国をまのあたりにして、台湾ナショナリズムに果たして勝機はあるかという問題です。この点について、わたしは、実存主義的に悲観的です。しかし、わたしの師は、ヘーゲル主義的に楽観的だといえるでしょう。対話は、もうずいぶん続いています。しかし、わたしたちは、お互いに相手を説得するにいたってはいません。本日、わたしの師は、それをもう一度試みました。驚くべき世界史的知識と、強い希望の力によって、わたしを説得し、また慰めようとしてくれたのです。わたしは、かれの原稿を、くりかえし読みました。そして今度だけはかれの親切を受け入れることにしました。といっても、部分的にですが。というのもわたしは、日本帝国が、ヨーロッパのそれとは実質的に異なったものだといまだに信じているからです。いまわたしが受け入れることを決意したものは、ときがたてば、台湾としての台湾への道が開けるといふかれの予測と、その出口は、自己自身に対する真の知識にあるといふかれの診断についてです。

しかしわたしは、簡単に降参するつもりはありません。そんなことするもんですか。師に譲歩する前に、もう一度その教えに逆らって、わたしの絶望と悲観が、すくなくとも部分的に、わたしの師自身によってもたらされたものだということをしめそうと思います（ベン、あんたが悪いんだよ！）。したがって、近代諸帝国とナショナリズムのこまごまとした分析に立ち入る代わりに、ここでは、ベネディクト・アンダーソンの方法論、すなわち比較歴史分析の、学問的、道徳的、政治的意義について語ろうと思います。そしてそのあとに、アンダーソン教授の救済的な自己認識という処方箋に従いながら、日本における台湾研究に関して、いくつかの論点を提起した

いと思います。

「常にオリンポスの山頂から考えよ」——比較歴史の解放的効果

アンダーソン教授のナショナリズム研究のアプローチもしくは方法論は、ある種の比較歴史、あるいは比較歴史社会学であるといえるかもしれませんが。しかし、それは、単なる歴史の比較ではなく、地球規模の歴史の比較であることがポイントです。すなわち、世界史的な比較分析なのです。このアプローチの重要な特徴は、歴史を鳥瞰的に眺めるということです、すなわち、同じような事件や現象が、単に通時的に展開するのを眺めるのではなく、それらが共時的に結びついている大きなイメージをとらえるのです。このようにして、ある特定の場所で起こった一つの出来事が、同時により大きな世界史のプロセスの一部となり、そのメカニズムとパターンが突き止められ、説明されてゆくのです。数年前に、かれは、わたしに手紙のなかで、“*Always Think Olympian!*”と警告しました。だからかれの方法を、「オリンポスの山頂からの眺め」と呼ぶこともできると思います。わたしたちがいま聞いたスピーチこそ、オリンポスの山頂からかれが眺めた神秘的な景色を、典型的に示したものだといえるでしょう。

台湾と台湾研究にとって、このグローバルな比較歴史という方法には、重要な、しかしながら相互に矛盾する意味が含まれていると思います。すなわち、それは、ある意味で、解放的で、励まされるようなものでありながら、他方で、拘束的であり、重苦しいものでもあります。わたし自身の台湾ナショナリズムの研究を例に取りながら、この論点を、さらに説明してみたいと思います。

最初に、山頂からの景色の解放的契機について。比較政治学と歴史社会学というアプローチは、わたしが学問をはじめて以来、ナショナリズム一般についての、またより限定的には、台湾ナショナリズムについてのわたしの考え方を深く規定してきました。現在においても、それはあてはまります。この方法には、次のような特徴があります。第一に、比較し、第二に、アイデンティティ形成のプロセスを歴史化し、第三に、(たとえ限定的、部分的なものであるにせよ) ある種の一般化、パターン化、類型化の可能性を探るということです。この三つの特徴は一つとなって、強力な「相対化」もしくは脱魔術化の効果を生み出します。たとえば、こうした見方からすると、一見したところきわめて特殊な台湾のナショナリズムは、その人の立場によって神聖にも邪悪にも映る、説明不能のユニークさをあっさりと剥ぎ取られ、完全に説明可能な社会学的一現象へと姿を変えてしまうのです。時間的にいえば、台湾ナショナリズムは、特定の歴史のプロセス、すなわち、近代国民国家形成の産物でした。空間的にいえば、それは、特定の歴史の期間の特定の地域間の交渉の帰結でした。すなわち、近代東アジア史もしくは世界史における国民国家形成と拡張の過程を通じた中心と周辺の交渉の帰結でした。

比較歴史に関するわたしの意識は、『想像の共同体』の翻訳をはじめ、ベネディクト・アンダーソンと個人的な知り合いとなったあと、急速に研ぎ澄まされてゆきました。かれがわたしに教えてくれた“*Always Think Olympian!*”という格言は、台湾(とそして日本)について考えるときの

わたしの個人的なモットーとなりました。この方法は、人の知性と感情に、興味深い解放的効果をもたらします。すなわち、わたしは、この方法のおかげで、さまざまな種類の過度に狭隘な「現地人の視点」から離脱することができました。わたしはそれによって、あまりにも政治に関わり合ったことから生じたルサンチマンから解放されたのであり、そして台湾を、より大きなコンテキストにおいて、離れた距離から、眺めることができるようになったのでした。さらに、「世界」というものがわたしの視野に入ってくるにつれて、わたしは、中国を相対化することができるようになっていった。そうしてわたしは、こと台湾に関するかぎり、多くの社会学者・人文科学者の考えに感染していた、深く根を張った中国中心主義とその民族主義的なメタ・ナラティブの桎梏を振り払うことができたのでした。比較歴史によって解放されたおかげで、わたしは、最終的にわたしの台湾に関する研究を、はっきりと、「世界史における近代台湾の登場」として、特徴づけることができたのです。ずいぶん長い間、そうした解放的な契機は、わたしの考えや感情に、とても積極的な影響を与えてきました。というのも、わたしは長い間、わたしにつきまとうてきた二つの亡霊、すなわち「祖国（台湾）」という亡霊と「帝国（中国）」という亡霊から逃れることができたからです。

オリンポスからの眺めによる台湾の再拘禁

しかしものごとは、常にかくも幸せに推移するわけではありません。ここでわたしは、比較史の拘束的な効果に眼を向けようと思います。

中国の台頭が現実となって以後、グローバルな比較史の眺めによってもたらされるネガティブな心理的効果が、よりいっそう明らかに、そして切実になってきました。かつてその比較歴史的分析は、わたしが台湾ナショナリズムの歴史的形成やその構造的起源を、帝国の狭間にとらえられた国民国家の事例として理解するうえで大きな助けとなったものでした。しかしながら、その同じアプローチが、つまりオリンポスの山頂からの同じ眺めが、いまや逆説的に、その同じ歴史的構造がほとんど打ち破りがたいものとして存在するという現実、わたしの眼を開かせることになったのです。すなわち、帝国は、台頭し、没落し、現れては、消えてゆく。しかし、このことは、台湾が、未来永劫、帝国の狭間にとらえられ、そこからの出口をもつことができないという地政学的な (geopolitical) 事実を、変えはしないということです。いいかえれば、複数の帝国的中心の共通の周縁 (*common periphery to multiple imperial centers*) に台湾が位置する地政学的な構造は台湾のナショナリズムを、アイデンティティを誕生させはしたが、その完成を禁じているということなのです。「賤民宣言」というわたしの最近のエッセイに横溢する悲愴感は、かくて徐々にわたしの心と体をむしばんでゆきました。わたしがまだ、若く、素直で、そして希望に溢れていた時代、アルベルト・カミュとそのシーシュポスをとても愛好していました。しかし、いまやわたしは、賢くなったとはいえないかもしれないが、とにかく年を取りました。そして、師とともに、山頂へと転び出て、そこから垣間見た景色といえば、閉じこめられた台湾の、運命的な、そして宿命的な姿であったのです。いまやわたしは、シーシュポスの絶望の深さを、ついに

理解することになったのです。そしてかれの抵抗が、いかにばかげたものであったのかも。

わたしの師の比較歴史の視座は、台湾を歴史において解放しました。しかし、同時にそれは、台湾を、地政学というより大きな歴史の檻にもう一度閉じこめることになりました。麗しの島よ、汝はいずこへ向かうのか。

救済としての日本における台湾研究？

比較歴史分析は、台湾に、知識の世界地図のなかに、それ自身の場所を約束し、そして現実政治の世界地図において、その場所を消し去りました。山頂からの、こうした二つの矛盾する啓示を、どのように和解させればよいのでしょうか。わたしは、戸惑い、そして悲観的になってしまいます。しかし、今日わたしの師は、わたしに、忍耐強くあれ、そして希望を失うなと諭しました。なぜなら、宿命の如くみえるものも、偶然のはたらきにほかならず、時の経過とともに、見たところアリのはい出るすきまもないような構造であっても、ひびが入り、出口を見つけることができるであろうから。わたしたちは、そのひび割れが生じるのを、座して待つわけではない。むしろ檻をこじ開けるために、行動を起こすべきである。そのための適切な行動とは、確固とした、そして傲慢でない (*non-arrogant*) 自己に対する知識を涵養することである。そうすることで、わたしたちは、知的世界と政治的世界の双方において、わたしたち自身を主張することができるようになるだろう。かれは、このように教えてくれました。

この希望の診断は、どれほど説得的でしょう？正直言って、わたしには判りません。というのも、わたしたちは、未来をはっきりと見通すためには、あまりにも歴史に縛られすぎているからです。しかし、同時にわたしは、かれの行動指針のなかに、ひとつの救済の可能性、苦境からの出口を認めます。ここにおいて、日本における台湾研究が問題となり、その重要性が見えてくるのです。

もし、台湾研究が、台湾においては、自己理解というかたちで、すなわち、台湾をその内側から定義するための知識として、行われるとすれば、日本で行われる台湾研究は、台湾を、外側から定義することをめざす知識だといえます。しかし、台湾にとって、日本の台湾研究は、どのような意味を持つのでしょうか。いかなる意味で、台湾に関する日本人の見解は、台湾人にとって重要なのでしょうか。わたしには、ひとつの単純な回答があります。それは、確固とした、傲慢でない自己理解を作り上げるために、わたしたちは、台湾に対するこの二つの視野を融合させなければならないからというものです。わたしたちは、台湾と世界を、ともに知る必要があります。日本における台湾研究は、台湾にとって、世界へ続く架け橋であると同時に、みずから自身へと回帰するための架け橋でもあるのです。わたしの好きな、ハンナ・アレントの例えを借りるなら、日本における台湾研究は、台湾にとって、世界と故郷の両方を代表するものなのです。この謎めいたいい方について、ここでもう少し、説明させて下さい。

オリンポスの山頂に登って、しばらくそこから下界を眺めてみましょう。そこから何がみえるのでしょうか。それは、世界でただひとつ、日本だけが、長きにわたる台湾研究の自生的な伝統

(native tradition) と、知的で真剣な専門研究者より構成された、自発的に生まれ、自律的で、活発な台湾研究の学会をもつという景色です。北米台湾学会は、主として台湾人の大学院生よりなるフォーラムです。また、いくつかの小さな台湾研究プログラムが、アメリカとヨーロッパに散在していますが、それらはほとんどすべてが、台湾政府により、開始されたもの、もしくは支援されたものです（中国における台湾研究は、国家の地政学的戦略の政策的道具であり続けています。そこには自律性も専門性も、ほとんど存在しないのです）。たしかに、この事実は、世界政治における台湾の周縁的な地位を反映したものです。しかし、この事実の裏側も、見失わないようにしましょう。いまや日本における学問分野としての台湾研究（the Taiwan studies in Japan as a discipline）は、たとえ、日本の内部で、他の主流の学問分野から周縁化され、それによって、不平やルサンチマンが積もっていたとしても、世界のなかで、つまり台湾の外部で、もっとも確立された強力な台湾研究なのです。

日本における台湾研究という学問分野の相対的な強さが、イギリスやフランスやアメリカにおける地域研究と同じく、植民地に起源を有することはいうまでもありません。それは、台湾という新領土を、支配する意志のなかで誕生したものでした。しかし、幸か不幸か、台湾研究は、植民地主義が消え去ったのちも、しっかりと根を張り、いまや例外的に開かれた場（field）として成長してきました。そこでは、多くの台湾人研究者が、ただ台湾という主題をめぐって、学問的に意義のあるやり方で台湾の外の世界に関与し、それに語りかけるようになりました。悲しいことではあるにせよ、多くの台湾人研究者にとって、日本における台湾研究が、台湾の外部に開かれた、愛する台湾について、拒絶されたり、無視されたりする心配なく語れるような、おそらくは唯一の場であるのです。多くの台湾人にとって、それこそが、世界なのですから。

しかしながら、それはまた、台湾の深みへと回帰する橋でもあります。なぜなら、好むと好まざるとにもかかわらず、近代台湾は、日本によって作られたとまではいえないものの、ともかくその重要な媒介を通じて、形成されたものではあるからです。台湾が、かつて日本の一部であったということは、日本もまた、台湾の分けられない一部であるということです。もし真の意味で、台湾を、その途方に暮れるような複雑さにおいて理解しようと欲するならば、日本と台湾に対する日本の見方を、迂回するわけにはいかないのです（わたしのみるところ、なぜ、台湾人が、震災後の日本に、世界中のどの国よりも多くのお金を寄付しなければならなかったのかという理由は、歴史のなかに見いだされなければなりません）。

要約します。日本における台湾研究は、台湾にとって、台湾知識人が、世界へと関与する場であると同時に、みずからを知るために必要な媒介でした。日本における台湾研究にかかわることは、台湾にとって、世界のなかで、故郷に回帰することです（To be engaged with the Taiwan studies in Japan is thus for Taiwan to be at home in the world）。故郷に帰る。ただし、世界のなかで。それは、台湾人のアイデンティティを、世界を拒絶するのではなく、それと直面しつつ、構築していくことを意味しています。これこそが、アンダーソン教授がこんにちの台湾に書いてくれた処方箋、傲慢でない自己理解というものを作りあげる唯一の方法なのです。そしてこの意味において、わたしたちは、日本における台湾研究が、囚われた台湾にとって、救済の可能性を、そこ

からの出口を、示すものだといいうるのです。正直に言って、たとえ、このことを知ったとしても、わたしはやはり悲観的です。しかし、不思議なことに、気が晴れて、勇気づけられたようにも感じるのです。ベン、あなたは、よくベケットの次のような台詞を引用しますね。「もうやっ
てられない。でもやっていくのだ」 (*I cannot go on; I will go on*)。

わたしがいま述べたことは、なぜ日本における台湾研究が台湾にとって重要かということです。しかしいったい、なぜ、そしてどのように、日本において台湾を研究するという営みは、日本にとって重要なのでしょうか。かくも超大国になり、ナンバーワンになることに執念を燃やすこの国にとって。ナンバーワンとしての日本にとって、台湾を研究する意味は何でしょうか。いまだに、支配への意志が残存し、働いているのでしょうか。それとも、なにか別の理由、単なる権力への意志よりも、高尚な何か、そこに働いているのでしょうか。おそらくは、道徳的な何か。わたしは、この疑問によって、わたしの報告を終えたいと思います。日本において、台湾を研究するという、とても寂しい営みに献身しているわたしのすべての親愛なる友人たちからのご教示を期待しながら。